

長野県版レッドリスト(植物編)の改訂でカテゴリー変更や新規追加された主な種・群落について

長野県版レッドデータブック維管束植物編(2002年刊行)、同 非維管束植物編・植物群落編(2005年刊行)の作成後、絶滅のおそれのある植物の生育状況の変化、自生地の新たな発見・消失等がありました。それらを踏まえ、今回の改訂では、掲載種・群落のカテゴリー変更や新規追加がなされました。その中から主な種や群落について紹介します。

I 維管束植物

以下、和名・科名の後の〔 〕は、〔前回(2002年)のランク⇒今回(2014年)の改訂ランク〕として記載しています。

1 長野県内で絶滅とされた7種の植物の再発見について

長野県版レッドデータブック維管束植物編(2002年)で絶滅種とされた31種のうち、2014年の改訂までに、7種の生育等が確認されました。

① ジロボウエンゴサク (写真 右)

ケマンソウ科〔絶滅(EX)⇒絶滅危惧IA類(CR)〕

川岸、山地などに生える多年草。関東地方より西の本州、四国、九州の温暖な地域に分布する。

1932年に天龍村で採集された後、確認されていなかったが、2005年に松本市の山林内で約100株が確認された。(撮影：上野 勝典)



② スギナモ (写真 左)

スギナモ科〔絶滅(EX)⇒絶滅危惧IA類(CR)〕

湖沼、湿原、河川などに生える多年草。1962年に須坂市で採集された後、確認されていなかったが、2004年に須坂市の湧水の流れる水路で確認された。長野県の生育地は国内分布の南限に当たる。(撮影：大塚 孝一)

③ コケリンドウ (写真 右)

リンドウ科〔絶滅(EX)⇒絶滅危惧IA類(CR)〕

日当たりのよい草地に生える越年草。1928年に採集された後、確認されていなかったが、2010年に富士見町で、2013年には茅野市で確認された。

(撮影：横井 力)



④ **ホソバシバナ** (写真 右)

シバナ科 [絶滅(EX)⇒絶滅危惧 IA類(CR)]

湿地や沼の縁に生える多年草。長野市等での生育記録があったが、確実な分布情報が得られていなかった。2003年に飯綱町で数十株が確認された。(撮影：大塚 孝一)



⑤ **ムカゴソウ** (写真 下)

ラン科 [絶滅(EX)⇒絶滅危惧 IA類(CR)]

やや湿った草地に生える多年草。1951年に採集された後、確認されていなかったが、2013年に木曾郡内で発見された。

(撮影：上野 由貴枝)



⑥ **マメダオシ** (写真 下)

ネナシカズラ科 [絶滅(EX)⇒絶滅危惧 IA類(CR)]

日当たりのよい原野に生える寄生植物。茎は細く糸状で奇主にからみつき黄色を帯びる。花は無柄で数個が束生する。1960年以降、確認されていなかったが、2007年に大鹿村で採集された標本が確認された。



⑦ **アイナエ** (写真 下)

マチン科 [絶滅(EX)⇒絶滅危惧 IB類(EN)]

日当たりのよいやや湿り気のある草地に生える一年草。1969年以降、確認されていなかったが、2005年に栄村、2007年に南木曾町で確認された。(撮影：尾関 雅章)



(標本：首都大学東京 牧野標本館)

2 絶滅の危険度が更に高まっているとしてランクアップした種

今回の改訂で、18種がランクアップしました。

① カザグルマ (写真 右)

[絶滅危惧IB類 (EN) ⇒ 絶滅危惧IA類 (CR)]

変更理由: 個体数減少が確認されたため。

(撮影: 土田 勝義)



② アズマギク (写真 右)

[準絶滅危惧 (NT) ⇒ 絶滅危惧II類 (VU)]

変更理由: 産地情報が減少しているため。

(撮影: 尾関 雅章)



3 新規追加された種

今回の改訂で、73種が追加されました。

① イトハコベ (写真 下)

[絶滅危惧IA類 (CR)]

湿地に生える多年草。2012年に長野市で確認された県新産種。長野県の生育地は国内分布の西限にあたる。(撮影: 中村 千賀)



② スナジスゲ (写真 下)

[絶滅危惧IB類 (EN)]

河川の砂地や湿った草地に生える多年草。横走る根茎があり、まばらに生育する。2012年に坂城町で確認された県新産種。



(標本: 長野県環境保全研究所 標本庫)

③ エゾサカネラン (写真 右)

[絶滅危惧IB類(EN)]

山地の林下に生えるラン科の多年草。2012年に南信で確認された県新産種。

(撮影：星山 耕一)



④ ユウスゲ(キスゲ) (写真 下)

[準絶滅危惧(NT)]

山地帯の草原と林縁に生える多年草。産地は、多数知られるが、個体数が減少している。



⑤ イヌスギナ (写真 下)

[準絶滅危惧(NT)]

やや明るい湿地に生える夏緑性のシダ。湿地の開発や宅地開発で減少している。



⑥ レンゲショウマ (写真 下)

[準絶滅危惧(NT)]

山地帯の林床や林縁に生える多年草。里山環境の変化や園芸目的の採取により、減少している。



⑦ エビラシダ (写真 下)

[準絶滅危惧(NT)]

山地帯の湿った岩壁に着生する夏緑性のシダ。産地が限定され、個体数も少なく、採取圧が高い。



(④の撮影：尾関 雅章、⑤⑥⑦の撮影：大塚 孝一)

II 維管束植物以外(蘚苔類・藻類・地衣類・菌類)

1 蘚苔類

カテゴリー変更のあった主な種を紹介します。

以下、和名の後の〔 〕は、〔前回(2005年)のランク⇒今回(2014年)の改訂ランク〕として記載しています。

① リシリゼニゴケ (写真 右)

〔情報不足(DD)⇒絶滅危惧I類(CR+EN)〕

過去に記録のある長野県内の2ヶ所の生育地のうち、1ヶ所で生育が確認できなかった。生育環境の悪化が強く懸念され、生育地点も極めて限定されている。



② クマノチョウジゴケ (写真 左)

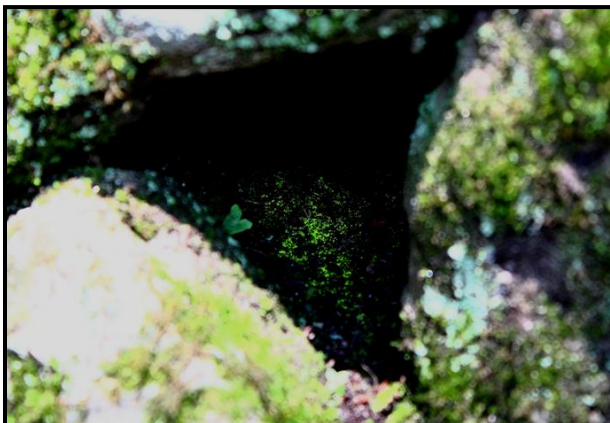
〔絶滅危惧(CR+EN+VU)⇒準絶滅危惧(NT)〕

八ヶ岳の複数地点において生育が確認された。葉が退化し、胞子体である蒴だけが目立つ。主に腐木上に散生する。

③ イシツチゴケ (写真 右)

〔絶滅危惧(CR+EN+VU)⇒準絶滅危惧(NT)〕

北アルプス、中央アルプス、南アルプスで生育が確認された。登山道付近に生育している場合も少なくなく、踏圧による影響が危惧される。



④ ヒカリゴケ (写真 左)

〔絶滅危惧(CR+EN+VU)⇒準絶滅危惧(NT)〕

山地の岩隙などに生育し、県内に広く分布している。なお、日本で最初にヒカリゴケが発見されたのは佐久市岩村田であり、この生育地は国の天然記念物に指定されている。

(蘚苔類の撮影は、いずれも 大石 善隆)

2 藻類

今回の改訂では、前回の 카테고리「絶滅危惧(CR+EN+VU)」を絶滅危惧I類(CR+EN)と絶滅危惧II類(VU)に区分しました。カテゴリ変更のあった主な種を紹介します。

(1) 新規追加された種

① ホソカワモズク [絶滅危惧II類(VU)]

湧水性の貧栄養、腐植栄養水域に、晩秋から早春にかけて生育する。長野県では高層湿原の池塘で池底や他の植物に付着して分布する。5箇所で生育が確認された。



(撮影：樋口 澄男)



(撮影：尾関 雅章)

② チャイロカワモズク [準絶滅危惧(NT)]

平地の河岸湧泉、湧水からの水路など、清冽な流水の河床、小石上、他の植物表面上などに付着し、晩秋から早春期に生育する。9箇所で生育が確認された。



(撮影：樋口 澄男)



(2) 野生絶滅から再発見された種

キヌフラスコモ

[前回(2005年)のランク 野生絶滅(EW)]

⇒今回(2014年)の改訂ランク 絶滅危惧I類(CR+EN)]

信濃町の野尻湖に分布していたが、導入されたソウギョの食害により、湖内では藻体が見つからず、県内に現存する本種は、野尻湖の底質中から採取した卵胞子に由来する培養株のみで、長野県版レッドデータブック(2005年)では、野生絶滅(EW)とされた。

しかし2011年の調査で、飯山市内の湖沼における分布が確認された。

(写真提供：国立環境研究所)



3 地衣類

今回の改訂で27種が新規に追加されました。その主な種を紹介します。

① ナミガタイシバイワリ (写真 右)

〔絶滅危惧(CR+EN+VU)〕

日当たりのよい、あるいは半日陰の石灰岩上またはその周辺の蘚苔類マット上に生える。産地が極限され、国内における記録が長野県と徳島県のみに限られる。



② コガネトコブシゴケ (写真 左)

〔準絶滅危惧(NT)〕

霧のかかりやすい高山の岩上、またその周囲の矮性低木上などに生える。産地が極限されているのに加えて登山者による踏みつけ、大気汚染による環境悪化により分布域の一部において生育条件が悪化している。

③ ナガサルオガセ (写真 右)

〔準絶滅危惧(NT)〕

霧のかかりやすい亜高山帯の針葉樹林において、枝に絡まって生える。大気汚染に弱いと考えられている。本来は、亜高山帯に広く分布する普通種であるが少なくとも一部地域で消失している。



④ ミヤマコゲリ (写真 左)

〔情報不足(DD)〕

高山の稜線などの日当たりのよい、あるいは半日陰の岩上に生育する。分布域の一部において、個体数が激減している。

(地衣類の撮影は、いずれも 原田 浩)

Ⅲ 植物群落

今回の改訂で、14群落が新規追加されました。その主な群落を紹介します。

① ナベクラザゼンソウ群落

飯山市(関田峠・茶屋池周辺)

山地帯のブナ林下の湿地や開けた湿原に見られる植物群落。多雪地の標高 1,000m前後に成立する。

ナベクラザゼンソウは日本固有で、北陸～東北の日本海側に点々と分布する。県内では関田山脈以外には分布が知られていない。湿地への侵入や踏みつけ、開発等による減少が懸念される。

(撮影：大塚 孝一)



② ススキ群落

木曾町(開田高原)

開田高原の標高約1,100mの半自然草原。在来馬である木曾馬の飼い葉を得るための採草場が、火入れと草刈りをとともに行う伝統的管理方法により維持されてきた。キキョウやユウスゲなどの絶滅危惧種が出現する。

近年、草地管理の簡略化や植林地への転換、管理放棄により半自然草原植生が変化または減少している。

(撮影：須賀 丈)



③ ミズゴケ群落・スズラン・ススキ群落

富士見町(入笠湿原)

入笠山 (1,955m)の北側の凹地にある。汚水や泥の流入が見られ、また乾燥化も進み、入笠湿原の存続が危惧される状態にある。

湿原南東側の斜面には、草刈りによりスズラン・ススキ群落が維持されている。落葉低木のズミの侵入もみられるが、人為的な管理により成長が抑制されている。

(撮影：尾関 雅章)

